

アトモスフィア

会長職をおえて

川 寄 敏 祐*

私は平成13年10月より1年間、日本生化学会会長として学会の運営に携わらせていただきました。その年急に顕在化した会員の大幅減少の問題、それに伴う経理上の問題、学会誌の国際的地位の向上の問題など学会が直面している問題を考える機会を与えられました。会員減の問題は森正敬副会長を委員長とする臨時委員会で大変熱心に検討いただきました。その結果、多くの新しい提案がなされ、これらのいくつかは、村松喬現会長（当時副会長）を委員長とする学術集會企画委員会の議を経て、例えば、将来の若手研究者の参入への呼び水としての学部学生の参加費無料化など、早速、昨年の大島泰郎会頭による第75回大会において実現していただきました。また、学会誌 Journal of Biochemistry の電子ジャーナルシステム HighWire への参加も谷口直之編集担当常務理事のご尽力により進展し、今春より、J. Biol. Chem. の直ぐ上という目に付きやすい場所にデビューしています。投稿数の増加、IFの上昇を期待しています。皆さんに仕事を分担していただいておりますので、私も何かしないと申しわけないと思ひ、会計担当理事と一緒に、余り知恵のいらないうところだと、学会経費の大口支出分の削減と「生化学」広告料金の増加を試みました。幸いにして、相手方の理解と協力によりある程度の目的を達することが出来ました。浮いた経費をすこしでも新しい事業に回すことができたらと希望しています。

さて、在任中には、日頃あまり考えていないことを尋ねられることもありました。あるとき、「日本生化学会は社会に対してどのような貢献をしているか」と問われました。基礎生命科学の応用科学への展開、生化学会への企業研究者の参加などあれこれ説明をしましたが、社団法人日本生化学会の事業目的には、「…生化学の進歩普及をはかり、もって学術、文化の発展に寄与することを目的とする」と謳われています。もう少し勉強していれば「わが国の学術、文化の発展に寄与しています」と答えられたかもしれません。

生命現象を化学の言葉で説明しようとする生化学は、ヒトゲノム塩基配列の決定が宣言された今日において、ますます重要性を増しています。核酸・遺伝子を扱う人が分子生物学者で、タンパク質、糖質、脂質を研究する人は生化学者であるという単純化が流行した時期があったようにも思いますが、現在、遺伝子操作は普通の生化学の研究室で一般的な研究手法として定着しています。生化学・分子生物学の区別はほぼ完全に消滅しつつあるように思えます。ポストゲノム時代といわれる今日では、遺伝情報の最終的産物としての翻訳後修飾を受けた完成タンパク質の解析の重要性が認識されて来ています。先日、遠心機のメーカーの人から「一時は遺伝子ばかりで遠心機はさっぱり売れなかったのですが、最近は巻き返しています」と聞かされました。生化学の復活はこんなところにも窺われます。学術面での貢献は今後も約束されていると考えて良いように思います。さて、文化の発展への寄与であります。かつての物理学がそうであったように、遺伝子複製の仕組みの解明などの生物学の発見が哲学にも影響を与えているともいわれています。しかし一方、クローン動物の作成などの成果が社会に漠とした不安を与えていることも否定できません。ヒトは驚異的なスピードで進歩する科学を本当にコントロールできるのでしょうか。専門家集団としての生化学会も大きな責任を持っていると思われまふ。国内外より尊敬される優れた研究能力と高い社会的見識を持つ多くの研究者が育ち、生化学会が人類の健康と福祉の増進に大きく貢献し続けることを期待してやみません。

最後に、この1年間、絶え間のないご支援・ご協力を賜りました会員の皆様、とりわけ理事・常務理事、各種委員会の皆様、そして、学会事務局の皆様、この場を借りて御礼申し上げます。

*本会前会長、京都大学大学院薬学研究科